春川教育大学校との短期学生交流事業

—地域教育学科を中心とした国際交流の取り組みとして—

小笠原　拓　OGASAWARA Taku
（准教授・学習科学講座）

キーワード：春川教育大学校（韓国）　国際交流　異文化理解　学科間交流の活性化

はじめに

春川教育大学校と鳥取大学地域学部は、2003年に結ばれた交流協定をきっかけに、学生の短期交流事業を続けている。2年間で1度ずつ（年によっては1年間で1度ずつ）、6名の学生が相互の大学を1週間に渡って訪問し、日本の大学や文化さらには、教育などについて相互に学び合うことを目的として行われる、短期交流プロジェクトである。すでに多くの学生が双方の大学での貴重な学びを体験し、自らの学生生活を豊かなものにするだけでなく、他の学生にも好影響を与えている。

筆者は、本年度、学科の国際交流担当として、一盛准教授（地域教育学科）、福元准教授（地域文化学科）とともに、本事業の運営に関わった。本報告では、本年度の取り組みを中心にこの事業の内容や意義について紹介するとともに、今後の課題などについても簡単にまとめておきたい。

1　参加学生と教員・スタッフ

本事業は2007年度より、1年ごとに春川側・鳥取側で交互にお互いの国を訪れる計画となっている。本年度は春川側が鳥取へ訪問することとなっていた。まず中心となるのは訪問側および受け入れ側の参加学生である。春川から訪問する学生は6名（男子1名、女子5名）、さらに指導教員として李周漢准教授が参加された。日本側は、昨年度、春川に訪問をした学生を中心に6名（男子2名、女子4名）が中心となって、受け入れ側学生として韓国側学生とともにプログラムに加わった。今年は7月の第1週という授業期間中にプログラムが実施されたため、通常授業との兼ね合いなど、難しい面もあったが、後で詳しく述べるように参加学生たちは、極めて熱心に取り組んでくれた。

教員の側で中心となったのは、一盛准教授（地域教育学科）、福元准教授（地域文化学科）と小笠原（地域教育学科）の3名である。この3名が中心となって、予算の獲得・学生の体制づくり・他の教員への協力の呼びかけ・プログラムの実際的な運営・当日の付き添い等、事業全般の企画・運営を行うこととなった。さらに当日のプログラム運営に関わって、国際交流センターの若教授（鳥取文化講座）と御舘准教授（日本語講座）、地域教育学科の住川教授（日本文化講座）、地域文化学科のケイツ教授（国際交流講座）に参加して頂いた。プログラムの内容を豊かなものとするために、教員の協力は不可欠である。後で詳しく述べるように、今年度は、これ以外にも多くの教員にプログラムのなかに参加してもらうことができた。

また忘れてはならないのが、事務職員の協力である。後で述べるように、本プロジェクトの経費については、その性格上、執行において細かな手続きや報告が必要なものが多く、予算に精通した職員の手助けが不可欠だった。そのため、今回は特に予算執行の面で、地域学部会計係の亀井健吾氏に多大な負担をお願いすることとなった。その他にも、多くの教員・職員にプロジェクトを支えて頂いた。

2　プログラムの企画—学生たちの取り組み—

実は春川側における受け入れは、プログラム化が進んでおり、学生の位置づけはあくまでプログラムの中における世話係といった色彩が強いようである。しかしながら鳥取側では、これまでの経緯もあり、前年度に春川での受け入れを体験した学生が中心となってプログラムを作成し、学生が主体となってプログラムの運営を行っていくというスタイルを取っている。そこで今年度も、これまでのやり方を踏襲し、約半年前から参加学生にプログラム作成を要請し、内容を具体化させていった。

実際には、週に1回、日本側参加学生と中心となる教員とが話し合いの場をもち、その都度、課題を出し合いながらプログラムの内容を決定するとともに、必要な費用や協力者および場所等の調整を進めていった。学生たちは昨年度の春川での恩返しをしたいという思いもあり、プログラムの設計には極めて積極的であった。無論、その具体的な進め方や調整の手法には稚拙な部分もみられたが、その点は教員ができる限りフォローするよう努めた。とくに予算面については、学生だけでは関与しきれない部分も多く、その点については前述の亀井氏からの協力を仰ぎつつ、筆者（小笠原）が調整を行った。結果として完成したのが、以下の[表1]である。

プログラムを企画する上でまず配慮したのは、単なる異文化体験に終ることなく、学生自身の学びへと繋がるものを行いたいということであった。特に4日目の日韓関係論講義と5日目のコリアンタウンへの訪問は、在日朝鮮人学校という

韓国でもあまり知られていない事象について、韓日双方の学生がともに考える機会を与えることができるのではないかと考えプログラムの中に加えた。近年、韓国と日本の間の関係は益々深まりつつあるが、一方で歴史的に乗り越えられていない問題も残されている。但し、そのことをあまり強調しすぎると、逆に参加する学生に余計な重圧を与えてしまいかねない。そのような意味において、「在日朝鮮人学校について考える」という課題設定は、比較的バランスの良いものではなかったかと考えている。

今年度のプログラムのもう一つの特色は、7 月上旬という時期を利用して、学生や教員と出会う機会をできる限り多く設定したことである。これまで春川側から鳥取への訪問は 2 月頃に行われることが多く、結果として教員や学生があまりキャンパス内に残っていないため、人と人との交流が十分に行えないという状況があった。そこで今年度は時期を工夫するだけでなく、そのことを最大限利用して、訪問側の学生たちに対して多くの鳥取大学関係者と語り合う場を提供したいと考えた。2 日目の異文化交流会や 3 日目の教育懇談会はそのような意図で設けられた。多くの教員の方々の協力もあり、地域教育学科に限らず、様々な領域の研究を行っている教員との出会いの場をつくることができた。

［表 1］2009 年度短期交流プログラム

日付	午前	午後	夕食など
6/30		米子空港着	歓迎会（地域教育学科教員と）
7/1	日本語授業①（康先生） 大学見学	日本文化体験講座① （住川先生、茶道部、邦楽部）	異文化交流会（茶道部・邦楽部の学生を中心に）
7/2	日本文化体験講座②（若先生）	附属小学校見学	教育懇談会（地域教育学科教員・学生を中心に）
7/3	湖山散策 地域学部授業見学（ケイツ先生）	日韓関係論講義（一盛先生） 「在日朝鮮人学校について」	安蔵森林公園での自然体験とバーベキュー
7/4	後片付け　自由時間	市内見学（わらべ館・砂丘等）	鳥取夜市にて学生交流会
7/5	市外見学活動（大阪・コリアンタウン）		コリアン・タウンでの食事
7/6	日本語授業（御舘先生） 日本料理調理実習	交流学習発表会	お別れ会（地域学部教員や関連職員などを中心に）
7/7	バスにて米子空港へ	米子空港発	

3　プログラムの実際

では、実際のプログラムはどのように進められたのだろうか。この点については、プログラム終了後、学生たちに報告用として書いてもらった記録を用いて、その様子をみていくことにしたい。なお、今回の日本側の学生の学科の内訳は、地域教育学科１名（2 回生）、地域文化学科４名（2 回生１名・3 回生３名）、地域環境学科１名（4 回生）である。4 学科中 3 学科の学生がいたこともあり、本プログラムは期せずして、学科間交流の場にもなっていた。

7 月 1 日（日本語授業①・日本文化体験①など）

日本での交流、初日は日本語の授業や日本の文化に実際に触れるというものでした。

午前中は、日本語の授業で、簡単な自己紹介を学び、韓国人学生だけでなく、日本人学生もハングルで自分の名前を書いて発表するなど、一緒に楽しく語学学習に取り組むことができました。この授業を通して改めて、国際交流において、たとえ相手の国の言葉が分らなくても、理解しようと前向きに学ぶ姿勢の大切さを感じました。

午後からは、日本文化体験ということで、茶道・書道・邦楽の３つを先生や部活動をしている学生の方を中心に、日本の文化といってもほんの一部ではありますが、この体験を通して日本文化の味わい深さを、韓国の学生に感じてもらえたと思います。最初は、住川先生に書道を教えていただきました。大きな半紙に、大きな筆を使って大きく一文字を書くという豪快で、それぞれの思いをこめた個性あふれる作品が出来上がりました。次に、茶道部の学生に協力していただき、茶道を体験しました。韓国とは違った日本の作法を学び、実際にお茶をたて、お菓子と一緒にいただきました。韓国の学生は、なれない正座が少し窮屈そうでしたが、熱心に取り組んでいました。最後に邦楽部の学生に協力していただき、実際の演奏を聴かせていただき、楽器体験をしました。韓国の学生はだれもが熱心に取り組み、最後には「桜」を韓国の学生全員で演奏しました。

初日から盛りだくさんな内容でしたが、この体験を通して、韓国の学生が日本文化に触れるだけでなく、多くの人々との交流も持つことができました。私自身にとっても、貴重な体験のできた一日となりました。自分の国の文化というものは、知っているつもりでも実際には分かっていなかったり、もっと奥の深いものであると感じました。今回の体験から、自分の国の文化を理解することの大切さを学びました。(地域文化学科・2年生・女子)

7月2日（日本文化体験②・附属小学校見学など）

朝から活発に動いた1日でした。

朝食をすませ、大学の武道場を訪れ、若副学長の指導のもと剣道と伝統芸能の傘踊りをしました。剣道は基本的な指導を受け、若先生を相手に面打ちの練習も行い自分たちもめったに体験できないことが出来ました。春川の学生も興味津津で練習に参加していました。

傘踊りは僕たち鳥取の学生も経験者がおらず、先生を見ながらの練習になりました。武道場が踊りの熱気でとても暑く汗をかきながらの練習でしたが、最後の踊りでは鳥取の学生も春川の学生も上手く踊ることが出来ました。文化体験としては面白い体験が出来ました。

午後は小学校見学を行いました。春川の学生は日本の小学校にたくさん驚いたようでした。特にプールの存在には驚いていました。施設面以外にも授業に教科書を使わないことにも疑問があったようです。

見学を終えた後の、小学校の先生との話し合いの場ではたくさんの質問があり面白い経験が出来ました。そして、韓国の教育事情にも興味を持ちました。春川の学生の教育に対する姿勢にはとても感心しました。

夕食は精進料理を食べましたが、僕にとっても初めての経験で僕たち日本の学生も慣れない料理に春川の学生も戸惑いながらも食べていました。驚きの経験でしたが、インパクトのある料理だったと思います。

1日を通して本当に貴重な経験ができ、プログラムの目的にも沿った充実した日になったと思います。(地域教育学科・2年・男子)

7月3日（授業見学・日韓関係論講義・自然体験など）

パートナーをはじめ、韓国の学生たちと仲良くなり、毎日楽しく交流していると、あっという間に4日が経ちました。

朝の朝食は学校の食堂で各自バイキングを楽しみました。9時からの湖山散策では、各自自由行動をして近くのスーパーに買い物に出かけたり、大学内を歩いたり、思い思いの時間を楽しみました。

授業見学では、地域文化のケイツ先生の授業を見学しました。一般の学生と一緒になって授業を受けるのは初めての体験だったので、韓国の学生は緊張していましたが文化の違いに関する授業だったのでとても興味深く参加していました。

昼食は学校の教室でお弁当を食べました。コリアンタウンに関するレクチャーでは、一盛先生が在日韓国人に関する授業を行って下さいました。今まで知らなかった歴史的な背景を知り韓国と日本の関係について、関心を持ちました。

キャンプの準備では、韓国の学生に鳥取の海の幸を楽しんでもらおうと市場に行き食材を買いました賀露の海岸にもよ

り、春川にはない海を見ることができ、韓国の学生は楽しんでいました。安蔵のキャンプでは、鳥取の自然を十分に感じることができ、自然の中で普段とは違った雰囲気で盛り上ってバーベキューを行いました。恋愛の話や学校の話など、みんなそれぞれ韓国の学生と会話を楽しんでいました。思い出深いいい1日となりました。(地域環境学科・4年・男子)

7月4日(市内見学)

この日は、市内見学と言うことで、バスに乗って、鳥取市内にある「わらべ館」と「鳥取砂丘」に行きました。

「わらべ館」では、日本の昔の学校の様子などが紹介されているブースをみんなで見学した後、2人1組に分かれて、体験コーナーや日本のアニメやおもちゃを見てまわりました。韓国の学生さんは、教育大学の学生さんということで、日本の教育や学校について興味があるようでしたが、私が一番印象に残っていることは、日本のアニメの多くを知っていたということでした。

残念なことに、わらべ館をまわっている途中から雨が降ってしまい、止むまでの間に、バスの運転手さんが気を使ってくださり、浦富海岸を見に行きました。私も、今まできちんと見たことがなく「きれいだ。」と思いましたが、韓国の学生さんは、春川には海がないから、海に行きたいと言っていたので、喜んでもらえたのではないかと思います。

雨が少し止んだ隙に、「鳥取砂丘」にも行きました。雨で地面がぬれていて、いつもあるような、きれいな風紋を見せることができず残念でしたが、みんな初めて見る砂丘を楽しんでくれたようで、馬の背をみんなで登り、記念撮影をしました。

この日は、土曜日だったので、市内見学を終え、駅に帰ってきてから、土曜夜市に行きました。あまり大きな規模のお祭りではなかったけれど、みんなそれぞれ楽しんでくれたようです。韓国の屋台では、あまり見かけない食べ物も多かったようで、買って食べている人もいました。(地域文化学科・

3年・女子)

7月5日(市外見学)

朝早くにバスに乗って、大阪へ出発!朝食は、事前に買っておいたパンやジュースをバスの中で食べました。バスに乗って、3時間ぐらいで大阪城に到着しました。大阪城は、豊臣秀吉が作った城であり、韓国を侵略しようと攻め入った人物です。日本で教わる歴史と韓国で教わる歴史は違うため、秀吉に対する認識が違うと感じました。大阪城には、秀吉に関する歴史や戦国時代の服装が展示してありました。天守閣からの景色は最高でした。昼食は、みんなで食べられる場所がなかったため、韓国の人とペアになって各自で食べました。大阪の名物の串カツのお店がたくさんあり、どれもおいしかったです。その後、バスで道頓堀・心斎橋あたりに移動し、ペアで各自行動しました。私にとって初めての大阪で、どこに何があるか分かりませんでした。もっと色々行きたかったけれど、時間が限られているため行けなかったのが残念です。大阪は、鳥取と違い人も店もたくさんあり、みんな楽しんだみたいでした。夕食は鶴橋に行き、みんなで集まって、焼き

肉を食べました。安くておいしかったので、大満足でした。帰りに、韓国の先生がアイスを買ってくれました。みんな、おいしく頂きました。韓国では、割り勘という感覚がなく、年上の人が払うのが当然だそうです。帰りのバスの中は、静かでした。みんな疲れていたみたいで、ぐっすり寝ていました。(地域文化学科・3年・女子)

7月6日(日本語授業③・調理実習・プログラム報告会など)

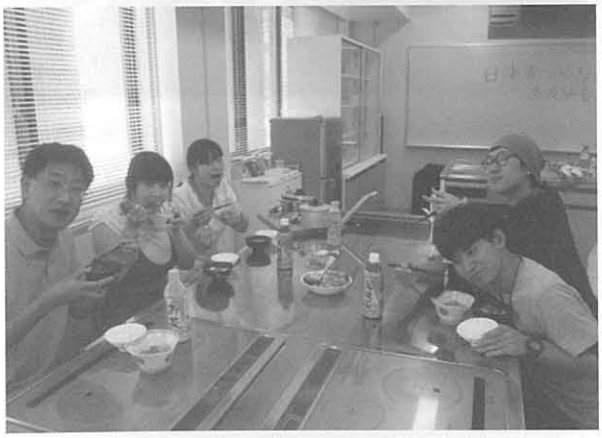
7日目は、まず1限に、このプログラムで2回目の日本語授業がありました。2限に行う調理実習に備えて、料理に関する日本語を学びました。

2限は調理実習を行い、肉じゃがと味噌汁を作りました。3つのグループに分かれて調理を行いましたが、どのグループも美味しくできました。話を聞いてみると韓国にも肉じゃがとよく似た料理があるようですが、日本のものほど甘い味付けではなく、唐辛子を入れて辛くするそうです。

3、4限には今回のプログラムのまとめとして、報告会を行いました。発表者は韓国の学生たちで、日本で過ごした7日間を振り返って感じた、日本と韓国の文化の違いについての発表を行いました。私たち日本の学生は、プログラムを通して撮っておいた写真を用いて、発表のサポートをしました。3限は主に今回のプログラムの思い出などを話しながら発表の準備を行いました。日本と韓国の文化の違いについて、日本と韓国では先生と学生の関係に違いがあるのではないか、日本の先生と学生は距離が近く、とても仲が良さそうだと韓国の学生が言っていたのを聞いて、私自身普段意識したことがないことだったので、驚きました。

4限の時間に行った報告会には、このプログラムに関わっていただいた先生方や、地域教育学科の学生など多くの方に足を運んでいただきました。この報告会によって、日本と韓国の文化の違いだけでなく、それぞれの学生がプログラムを通して感じたことや、考えたことを、少しでも多くの人に知ってもらえることができたのではないかと思います。皆の楽しそうな表情の写真が映し出されるのを見て、今回のプログラムが充実したものであったと感じることができました。

夜には送別会がありました。私たち日本の学生は「ふるさと」を、韓国の学生は「アリラン」を歌ったり、鳥取大学で過ごした7日間の思い出や、将来の夢などを話して、別れを惜しみながらも鳥取大学で過ごす最後の夜を楽しみました。(地域文化学科・3年・女子)



4　学生の感想

前項においても、学生たちが積極的にプログラムに取り組んでいる様子や、交流を通じて、貴重な異文化体験をしているだけでなく、普段の授業では得ることのできない学びを行っている様子が見て取れるのではないだろうか。学生自身の、プログラム全体を通じた感想を幾つか取り上げ、そのことを確認しておきたい。

(感想1)

今回の春川教育大学校との短期交換留学はたくさんの事を

考えるきっかけになりました。教育者を目指す春川の学生はとても熱心で教育に対する姿勢は見習うべきことも多かったです。しかし、韓国の教育に関することについては多くの疑問をもちました。国を隔てることでこれほど教育の現場というのが異なっているのが不思議でした。

国が違えば言語はもちろんですが、文化や習慣が大きく違っていてとても興味を持ちました。そして他の文化や習慣に触れてみたいとも思いました。たくさんの文化がある世界をより知りたい、そしてたくさんのことを感じたいと思います。今回の交換留学研修で大学生の間にもっとたくさんの事をして、いろいろなことを感じ学んでいきたいと思いました。そう感じさせてくれたこのプログラムと春川の学生、先生方に感謝しています。このプログラムに参加させていただきありがとうございました。本当に貴重な体験でした。(地域教育学科・2年・男子)

(感想2)

一年前、韓国に行った時には、一年後自分が歓迎する側になるということはあまり考えていませんでした。今回、韓国の学生さんを受け入れる準備をしてみて、人を歓迎することの大変さを実感しました。でも、その分充実感がありました。そして、大変だった分、韓国に行った時よりも、日本人学生の結束が強まったように思います。

韓国の学生さんとは、1年ぶりの再会で、最初は少し緊張しましたが、会って10分もすると、まるで昨日も会っていたかのように、楽しく過ごせました。みんなと過ごす時間は本当に楽しく、心が通じていれば言葉は必要ないということがよく分かりました。

最後になりますが、今回、この研修に力を貸してくださったすべての方に感謝をしたいと思います。この研修をきっかけとして、韓国そして異文化交流にさらに興味が湧きました。これからも、今回知り合った友達と交流を続けていきたいと思います。(地域文化学科・3年・女子)

おわりに—今後の課題など—

今回は、これまでとは異なる時期に行われたこと、国際交流に不慣れなメンバー(教員)が中心的な役割をはじめて担ったことなど、困難も予想されたが、何とか無事にプログラムを終えることができた。韓国側の引率教員であった李周漢先生が、極めて協力的であったことにも助けられ、日本側の学生だけでなく、韓国側の学生も、プログラムの内容に非常に満足した様子であった。今後も、今回の方式を踏襲しつつ、より充実したプログラムとなるよう工夫を重ねていければと考えている。

無論、プログラム運営において、何ら問題がなかったという訳ではない。最後に、当事者の立場から、今後の課題をいくつか指摘しておきたい。

第1に、絶対的なマンパワーの不足である。国際交流は相手があるものであり、ちょっとした手違いやミスが大きな問題に発展する可能性を孕んでいる。引率や交通手段の手配など、周到に準備をしているつもりでも、当日、ちょっとしたハプニングによって、予定が狂わないとも限らない。そんな場合に備え、教員や職員が常にプログラムの運営状況を確認する必要があるが、今年度のように授業期間中にプログラムが行われる場合、関係教員も普段の授業を抱えており、運営に専念することが非常に難しかった。(個人的なことを言わせてもらえれば、私自身、プログラム期間中はかなりの睡眠不足状態となり、ゼミ生などには、かなり心配をかけてしまった。)できれば、学部内にしっかりしたWGを形成し、長期に渡る計画によって事業を進めるような体制づくりが望まれるが、今のところ関係教員の頑張りで、どうにか運営を行っているというのが実情である。

第2に、事業を進める上で必要な予算についての問題である。予算については、本来、事業の性格上、恒常的な予算で運営されることが望ましい。基本的に春川側の学生および教員の滞在費やプログラム中の旅費・教材費などは、こちらが負担することになっており(春川側への訪問の際は当然その逆)かなりの額の経費が必要となる。しかし現時点では1年ごとに学長裁量経費を申請し、それによってプログラムに必要な経費をまかなっている。今年度の場合、さらに足りない部分については、学部長経費から補助を受けることができた。しかしながら、当然行うことが決まっている事業について、1年ごとに経費を申請するというのは、やはり不合理である。計画性をもってプログラムを運営していく上でも、今後は、恒常的かつゆとりのある予算の計上が望まれる。

第3に、宿泊についても若干触れておきたい。今回は、バードピア(鳥取大学学生施設)、安蔵森林公園、湖山クラブという三つの施設を利用した。バードピアに関しては費用が極めて安価であり(寝具レンタル料以外は無料)、本学学生と春川学生が生活を共にすることで、相互交流も深まるという点から極めて有用な施設であるが、若干施設が古くセキュリティの面でも不安が残った。一方、湖山クラブについては、本来職員用の施設であることから、費用や利用規則の面で利用が制限される部分があり、学生同士の交流なども十分に行えないという問題がある。安蔵森林公園は、鳥取大学から比較的近く、鳥取の自然を体験する上でも貴重な施設と言えるが、費用的には1泊が限界である。春川側への訪問の際には夏期休暇中の学生寮を利用しており費用やセキュリティの心配はない。ホームステイの利用なども含め、宿泊については、今後も検討をしていく必要があるだろう。

とはいえ、本プログラムに関わったことは、参加した学生のみならず、教員にとっても貴重な体験であった。今後もプログラムが益々充実し、学部全体の活性化にも寄与することを期待したい。(了)